生活作文を　書こう

生活作文って、なあに？

お手つだいをしたり、ペットの世話をしたりと、毎日の自分の生活の中で、気付いたこと、感じたこと、不思議だなと思ったことを文章にしたものが、生活作文です。

◆ 書くことを　選ぼう

・毎日の生活の中から、がんばっていること、びっくりしたこと、大好きなことなど、自分の気持ちがたくさん書けそうなことをさがしましょう。

・「○○へ旅行に行った」ような作文は、やめましょう。

【テーマの例】

いとこの赤ちゃんの話から、自分が大切に育ててもらったことに気付くお話。

バスに忘れ物をしたことから様々な経験をし、自分にはいろんなことができるんだと気付くお話。

歯医者で歯を抜く恐怖とたたかったお話。

メダカと自分を重ね合わせ、泳ぐ意味や楽しさに気付くお話。

◆ 書いてみよう。

・字数　【1年】　１２００字以内　　【2、3年】　１２００字～１６００字以内

【4～6年】　１６００字～２４００字以内

・作文の題名、学校名、名前はマスの外に書く。

・カタカナを使うのは、外来語、擬音語（擬声語）、動植物名を原則とする。（擬態語はひらがなで書く。）

・むやみにカタカナを使わない。

【例】　×ゴミ、ビックリ、ソックリ、オーイなど

・むやみに英語の表記や記号（！・？・ー・ぁなど）を使わない。

【例】　×おーい　○おうい　　×あぁ　○ああ

◎　ゆうしゅうさくひんの　だいめいと　かきだしと　おわり
（せいかつさくぶん）

「2019年度版　みかわの子（1年生の作品）」より抜粋

○『ぼくとパパのサイクリング』

「パパ、いくよ。早くおきて、おきて。」

日よう日のあさ六じに、ぼくとパパのじてん車のたびがはじまる。

いつものぼくは、早おきがにがてだ。でも、この日だけは、早くおきてパパをおこす目ざしどけい」なのだ。

（中略…おとうさんとすすんでいくみちや、そのときに見たもの、休けいのようすなどがじゅんじょよく書かれています。）

「すいか。」

「か、か、からす。」

かえりみちは、しりとりたいけつだ。いえにつくまで、しゃうぶはつづく。

るすばんのママといもうとに、おみやげのパンをわたすと、二人ともにこにこえがお。このえがおが、ぼくとパパのゴールだ。

つぎは、いついけるかな。たのしみだな。

○『としごのおにいちゃん』

ぼくには、一つ上のおにいちゃんがいます。おにいちゃんとは、しんちょうもたいじゅうもおなじくらいで、よくふたごやともだちとまちがえられます。ゲームやけんかだって、いいしょうぶ。かけっこなんて、ぼくのほうがはやいくらい。もしかしたら、本とうはぼくがおにいちゃんではないのかなとおもうこともあります。

（中略…スーパーでまいごになってしまったときに、おにいちゃんがとった行動や会話がくわしく書かれています。）

ぼくは、おかあさんにあえないとおもってなけてしまったけれど、おにいちゃんは、こんなぼくをはげましてくれて、ひっぱってくれて、かっこいいなとおもいました。そして、おにいちゃんがぼくをたいせつなおとうととおもってくれているのをしって、うれしかったです。ぼくもおにいちゃんみたいに、やさしくてかっこいい男になりたいとおもいました。おにいちゃんが、ぼくのおにいちゃんでよかったです。

○『ぼくのだいいじな　は』

八月七日、ついに本ものの子どものはがぬけた。どうして本ものかというと、きょ年のなつ、ぼくは、よぶんなはを手じゅつでぬいたから。「かじょうし」という名まえだ。

（中略…びょういんでのようすや、にゅういん中に思ったことがくわしく書かれています。）

このはは、ぼくが手じゅつでがんばったしょうこ。それに、こわいことがたくさんあったけれど、いいおもいでもあるんだ。だから、本もののはといっしょに、ずっとだいじにとっておくよ。

◎　ゆうしゅう作品の　だい名と　書き出しと　おわり

（生活作文）

○『**かわいいそうくん**』（「2019 年度版　みかわの子（２年生の作品）」より抜粋　）

　そうくん０さい。ほっぺがぷにぷにしている。手とゆびがみじかい。おなかはたいこみたい。おしりはおもちみたいでおいしそう。せは、ぼくのはん分しかない。そうくんは、ぼくのいとこだ。
　さいきん、首をよこにふっていやいやと、いやなときの気もちを出す。ごはんをたべたくないときにいやいや。ねむたいのにねたくないときにいやいや。
「こっちにおいで。」
と、よんだときにもいやいや。
　お兄ちゃんや友だちに、
「いやだ。」
と言われたときは、すごくいやな気もちになるのに、そうくんに、いやいやと首をよこにふられたときには、かわいいって思うのは、なんでだろう。

（中略…そうくんに対する気持ちや、そうくんの行動についてくわしく書かれています。）

　ときどき、ぼくの赤ちゃんだったころの話をしてくれる。ビデオも見せてくれる。（中略）
　ぼくはぜんぜんおぼえていないけれど、家ぞくが大切にそだててくれたことを、そうくんといっしょにいて、もういちど思い出した。
　そうくんが大きくなったら、こんどはぼくが、そうくんが赤ちゃんんだったころの話をたくさんしてあげよう。（中略）
「そうくんのぜんぶがかわいかったんだよ。みんなから大切にそだてられたんだよ。」
って。たのしみだな。

○『**じいちゃんとのやくそく**』（「2013 年度版　みかわの子（２年生の作品）」より抜粋）

　ポク、ポク、ポク。
　これは、木魚の音です。わたしは、毎日学校に行く前、わたしの家の前にすんでいたじいちゃんにおきょうをあげてから、学校に行っています。

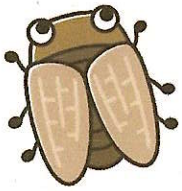
（中略…大すきなおじいちゃんとの思い出ややくそくについてくわしく書かれています。）

　わたしは、今でも、じいちゃんがいなくてさびしいけれど、じいちゃんとのやくそく、これからもまもるよ。かわいがってくれて本当にありがおう。また、ゆめに出てきてね。

◎ゆうしゅう作品の題名、書き出しとまとめ

「2012年、2013年度版　みかわの子（３年生の作品）」より抜粋

○『夏の夜の大かんさつ会』



「お姉ちゃん、セミのぬけがらが動いてる。」
妹のひよりがおどろいたように大きな声で言いました。夜八時ごろのことです。

（中略…セミのよう虫がだっぴする様子をくわしく書いています。

セミはたまごからせい虫になるまで、７年も土の中にいるそうです。それなのにやっとせい虫になっても一週間しか生きられないのです。こんなに苦労してせい虫になったのに、一週間しか生きられない
のはかわいそうだと思いました。でも、たった一週間しか生きられないセミが、こんなにがんばってい
るのを見て、わたしもいろんなことに一生けんめいがんばろうと思いました。セミさん、地上の夏を思いっきり楽しんでね。

○『ぼくとヒヨドリの四十日せんそう』

ぼくの家では、毎年トマトやキュウリを育てている。家の庭にもいくつもプランターをおいてそこで育てるんだ。毎年、とてもおいしいトマトやおいしいきゅうりができる。今年もたくさんとれた。
ぼくは、家でとれるトマトが大すきだ。あまくて、お店に売っているトマトの百倍くらいおいしい。
ところで、ぼくには天てきがいる。家の庭に来るヒヨドリが。ぼくたちのトマトがせっかく赤くなってもヒヨドリが食べてしまう。

（中略…ヒヨドリから、トマトを守る作せんをたてて、実行している様子を書いています。）

来年もトマトを育てたいな。そして、もっとびっくりするような仕かけを作ってヒヨドリをおどろかせてやるぞ。

○『ぼくのロボット生活』

ぼくは、この夏休みロボットになった。
「そのまま、くるっと後ろに回れる。」
鉄ぼうにすわていたらお母さんが行ったので、
「できる、できる。」
と言って、ぼくは思いっきり後ろに回った。ドッシーン。ぼくはそのままふきとんで、鉄ぼうから落ちてしまった。
「いたい、いったあい。」
ぼくは、はじめていたくてないた。

（中略…ギプスをつけた不自由な生活の様子をくわしく書いています。）

そして今日、ギプスがとれた。とうとうぼくのロボット生活が終わった。ずっとせおっていたランドセルを下ろしたようなへんな気持ちだ。セミがだっ皮したらこんな気持ちかな。元気でいるってすごくいい。もちろんぼくのぬけがらは、妹にプレゼントした。

◎優秀作品の題名、書き出しとまとめ（生活作文）

「2021年度版　みかわの子（４年生の作品）」より抜粋

○『きずだらけのたから物』

「うわぁ、すごい。かっこいいなぁ。」

公園へ遊びに行ったとき、周りを見ていたわたしの口から自然と声が出ていた。周りでは見たことあるけれど、名前は分からない乗り物に乗っている人たちがいた。くねくね、すいすいと乗って、坂道でなくても前に進んでいる。みんなすごく楽しそう。お父さんとお母さんに聞いてみても名前は分からなかった。

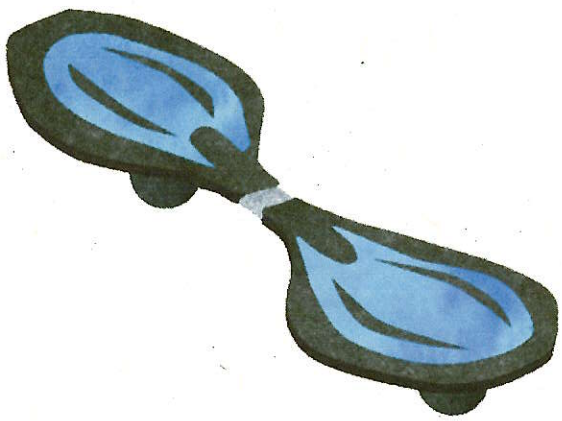
家に帰って調べてみたら、リップスティックという乗り物だと分かった。その後も公園へ遊びに行くたび、乗っている人たちをうらやましく思った。いいな。乗ってみたいな。ほしいな。でも、わたしのたん生日もクリスマスもまだ先。買ってもらうことはできそうにない。お母さんに聞いてみたら、

「買ってあげることはできないけど、ほら、あの自分のちょ金箱にお金あるじゃん。」

と言われた。そうだった。じいちゃんの家にはわたしのちょ金箱がある。このちょ金箱は、テストで百点をとると、じいちゃんがごほうびで百円をくれる。それで、こつこつとためてきた大切なお金。ずっと使うのがもったいなくて今まで使えなかったけれど、どうしてもリップスティックに乗りたくて、ちょ金箱を開けようと決めた。

（中略…リップスティックを買い、乗れるようになるまでがんばって練習した様子が書かれています。）

まだまだ始めたばかりのリップスティック。上手に乗っている人を見ると、くやしく感じるときもある。だけど、リズミカルに乗っている人を見ると、自分もあんなふうになりたいなと思う。いつかすいすいと乗れるようになって公園でヒーローになれるまで一生けん命練習しようと思う。ヒーローになれたとき、わたしのたから物は今よりきっときずだらけになっているだろう。



◎優秀作品の題名、書き出しとまとめ（生活作文）

「2016年度版　みかわの子（５年生の作品）」より抜粋

○『トウモロコシ作りにちょう戦』

ぼくの家では、おじいさんが中心となって、畑で野菜を育てている。おかげで、一年中、新せんな野菜を食べることができる。ぼくも毎年春から夏にかけて、夏野菜作りにちょう戦している。去年はトマトの年、おととしは、キュウリの年だった。

（中略…今年はトウモロコシ作りにちょう戦した様子がくわしく書かれています。）

今年のトウモロコシ作りの季節は終わった。しかし、ぼくのトウモロコシ作りは終わっていない。だって、おじいさんが育てた、あの、うまいトウモロコシを、いや、おじいさんのトウモロコシ以上にうまいトウモロコシを、自分で育てるという、ぼくのちょう戦は終わっていないのだ。来年こそは、にっくきハクビシンに勝利して、うまいトウモロコシを手に入れたいと思う。

○『気持ちで負けない』

先生が読み上げる最後に、ぼくの名前があった。よっしゃあ、と心の中でさけんだ。ぼくは、運動会のリレー選手になれたのだ。これで、二度目のリレー選手だ。前回は、二年生の時で、なんとなく終わってしまった。

（中略･･･リレーの練習について、うまくいかなかったこと、落ち込む気持ちを乗り越え、努力したことについて書かれています。）

お父さんの声がした。ぼくは前だけを向いて走った。これならいけるかもと思ったしゅん間、一人にぬかされた。どんどん背中が遠くなる。でも、まだ一人にしかぬかされていない。ゴールが目の前になったところで横を走る子に気づいた。こんなに負けたくないと思ったのは初めてだった。全力で足を動かした。

「やったあ。」

ぼくは、初めて三位でバトンをわたせた。チームは、二位になれた。○○くんが二位にしてくれたのに、

「むっちゃがんばったやん。」

と、チームの一人一人に声をかけていた。

リレーの選手になれてよかった。このチームでよかった。お父さんの笑顔が心に浮かぶ。家に帰るのが楽しみだ　　なと思いながら、ぼくは、みんなの笑顔の輪に加わった。

◎優秀作品の題名、書き出しとまとめ（生活作文）

「2021年度版　みかわの子（６年生の作品）」より抜粋

○『弟子ができた』

そうじはきちんとやるものだ。きれいにできると気持ちが良い。六年生になり、そうじを担当する場所が増えた。そうじ場所を決めるときに、ぼくは、一年生のそうじの手伝いに立候補した。六年生同士だと真けんにできない子も中にはいるが、一年生ならそうじをがんばってくれそうだと思った。小さい子が好きだからとかいう理由ではなく、そのときはただ仲よくできたらいいなと思うくらいだった。

（中略…一年生とのそうじは想像とは違い、なかなか言うことを聞いてもらえず苦労したことや、自分が教えてもらったことを思い出したり、どう話したら伝わるか考えたりしながら、一年生とかかわったエピソード、一年生とともに自分自身も成長したことについてくわしく書かれています。）

かんとく不行届きという言葉を家で聞いたことがある。意味を調べたら、『もし部下が失敗したらそれを指示した上司の指導が不十分だったとして、おわびすることがあること』と書かれていた。ということは、一年生がきちんとそうじができていなかったら、ぼくの責任になるということだ。これから先、どう教えたらいいかと考えたとき、しっかりと教えなければならないと思った。自分が間ちがったことを教えてはいけないと思った。心が引きしまる気がした。

二学期からは、そうじの担当も変わる。今までに教えた弟子たちは、一人でもとまどわずにそうじができるかな。ぼくは新しい弟子たちに、自信をもって教え続けていきたい。そして、ぼく自身も成長していきたい。